

出題のねらい

一般後期は、現代文2題(文学的文章、論理的文章)、古文の計3題のうち、2題を選んで解答します。

㊦は、本間千枝子『父のいる食卓』からの出題です。実父と養父の二人の父を持つ著者が、自らの少女時代を回想した作品です。論理的文章と同様、文学的文章もまた表現に注意しつつ、文脈を丁寧に読み解く必要があります。作中、著者自身が回想する当時の自分と、自分に対する大人たちの評価は、必ずしも一致しません。その対比に注目し、表現と文脈に沿いつつ読み解けているかどうかを問いました。

㊧は、苦野一徳『はじめての哲学的思考』からの出題です。抽象的な「哲学」を平易に説いた文章について、読解に必要な基礎知識を持っているか、執筆者の説明を丁寧に追うことができるかを問いました。内容理解が容易だったようで、各問とも正答率は高めでした。一方、それぞれの箇所を丁寧に読み解けているか、問題に即した解答となっているかどうかによって、得点に大きな差が出ました。

㊨は、日記文学『更級日記』からの出題です。作者である菅原孝標女は、源氏物語などの物語世界に憧れた文学少女でしたが、晩年になって仏教に対する信仰心を次第に深めてゆきました。出題箇所では、平安京全体が大嘗会の御禊で大騒ぎしているなか、どうしてこんな日に物詣に出かけるのか、という非難や嘲笑を受けながら、かたくなに初瀬の長谷観音へ参詣の旅に出かける場面が、印象深く回想されています。



【解答】(50点)

- | | | | | |
|----|--|------|-------|---------|
| 問一 | a 豪勢 | b 憤慨 | c 侮 | |
| | d 指揮 | e 傑作 | | (各2点×5) |
| 問二 | I イ | II エ | III エ | |
| | IV イ | V ア | | (各2点×5) |
| 問三 | そば | | | (3点) |
| 問四 | 日常の些細(～)を表現する(性格) | | | (3点) |
| 問五 | 台所に近寄ることも許されず、大嫌いな赤いパンツをはかせられようとしたから。 | | | (5点) |
| 問六 | ア | | | (3点) |
| 問七 | 金仏さま | | | (3点) |
| 問八 | (直都は)自分の子供を義兄にとられたのをいつもどこかで恥じて寂しく思っていた。
(忠礼は)本当の父子の情の方が、強い絆で結ばれていないかいつも不安だった。 | | | (各5点×2) |
| 問九 | ウ | | | (3点) |

【解説】

- 問一 漢字の知識を測る問題です。dの正答率が非常に低く、そのほかaの「勢」を「盛」、bの「憤」を「奮」、e「傑」の「夕」を「祭」の左上のようにした例が多く見られました。
- 問二 慣用表現に対する知識、文脈に合う語句を選ぶ判断力をはかる問題です。正答率はまずまずで、それぞれ7・8割でした。
- 問三 全体の構成から文章の主題を読み取る思考力、文脈にふさわしい語句を選び取る判断力をはかる問題です。本文は2つの回想を中心としており、いずれも「そば」に関わるものですから、正答を導くのはそれほど難しくありません。7・8割の正答率で、誤答は「日曜」が目立ちました。
- 問四 本文の段落構成を把握し、各段落の叙述を適切に読み解く思考力・判断力を測る問題です。「直都」の性格は、正答部分を含む段落のなかで分析されており、その段落を見つけ出すまではよくできていました。「蔑んだ言葉(～)気がすまぬ」を抜き出した例が目立ちましたが、それでは直前の「楽しいことは……」のニュアンスが抜けてしまいます。段落内の叙述を注意深く読み解けば、「楽しいことは」から「気がすまぬ」までを簡潔に言い換えたのが正答部分だと気づきます。正答率は7割程度でした。
- 問五 問四と同様の思考力・判断力に加え、読み解いた内容を適切に要約する表現力をはかる問題で

一般入試／国語(後期)

す。傍線部の行動を「私」が起こした理由は、直前の段落に説明されています。「おまけに」とあるので、理由は2つあります。「台所に近よることも許されない」のみを記した解答が目立ちました。また、設問に「本文中の語句を用いて」とあるので、指示に従わずに適当に要約した解答は、加点されない可能性があることにも注意しましょう。完全解答は4割程度でした。

問六 設問を正しく理解し、本文を適切に読み解く思考力・判断力をはかる問題です。設問に、「『私』はどのように説明しているか」とあるので注意しましょう。エは明らかに不適当。イは「直都」による評価、ウは「高枝」による評価ですから、正答はアのみです。正答は半分程度でした。

問七 表現に注意し、類似した意味の語句を選び取る判断力をはかる問題です。設問に、「比喩的に」とあるので注意して下さい。「毎晩お通夜」とする解答が目立ちましたが、これは忠礼の家の食事の様子を喩えたもので、「顔」の様子ではありません。正答は半分程度でした。

問八 各段落の叙述を適切に読み解く思考力、読み解いた内容を適切に要約する表現力をはかる問題です。正答に関わる段落を見つけ出すのはそれほど難しくありません。2つある解答欄のうち、「直都は」の方は、本文をそのまま抜き出しても字数に収まるので、正答率は高かったです。これに対して「忠礼は」の方は、抜き出すだけでは字数を超過してしまうので、本文の叙述から外れぬように注意しつつ要約する必要があります。日本語として不完全な解答、本文から外れて大雑把に説明しただけの解答が目立ち、完全解答は4割程度でした。

問九 本文と設問の選択肢を読み解く思考力、適切な選択肢を選び取る判断力をはかる問題です。選択肢の表現を丁寧に読み解きましょう。アは「高枝」の個人的な見解に過ぎず、養父母が実際に「分からなかった」かどうかは、本文に記されていません。イも「直都」たちの見解で、「私」自身がおまけに認めていたとは書かれていません。エは「避けたかった」が本文に合致せず、オは明らかな誤りです。本文によれば、「直都」は「家族全員を巻き添え」にして「楽しいこと」をしたがる人物で、そば打ちの日には「おいしい」とか「少し固すぎる」など、皆であれこれ言いつつ賑やかに食べるのを好んでいたのが、正解はウです。正答率は3・4割程度でした。



【解答】(50点)

問一	a 症状	b 滑稽	c 体罰	
	d 源流	e 悲惨		(各2点×5)
問二	ウ			(2点)
問三	ひとまず			(3点)
問四	I イ	II ア	III エ	
	IV オ	V ウ		(各2点×5)
問五	A エ	B ウ	C イ	(各3点×3)
問六	そもそも			(4点)
問七	できるだけ			(4点)
問八	イ			(3点)
問九	対話を通して、その本質を深く理解し合える可能性がある(から)			(5点)

【解説】

問一 漢字の知識を問う問題です。毎年、必ず漢字が問われるので、問題集を利用した書き取りの練習は必須です。「滑稽」「悲惨」に誤答が目立ちました。

問二 語彙力を問う問題です。「ちまた」の基本的な意味を知った上で、文脈に合った意味合いを考える必要があります。この点を考慮しない、イ・エの誤答がありました。

問三 語彙力を問う問題です。日常的に用いられる「とりあえず」とはどのような意味かを考えた上で、本文中から類義語を探す問題です。正答率は5割程度でした。

問四 論理的文章によく出題される、空欄に接続詞を補う問題です。前後の文脈がどのような関係にあるか、その関係を繋ぐにはどの接続詞がふさわしいか、この2つをよく考える必要があります。

問五 空欄補充の問題です。ものごとの様子や情景や人物等を描写する動詞・副詞・擬声語・擬態語などを問う問題は多く出題されます。こういった個々の言葉の意味や語感を知っておくことが大事です。Bについて、前の箇所に「二五〇〇年もの長きにわたって」とあるので、そこだけに注目してエ「延々と」を選択した誤答が目立ちました。この文の後に「思考の深さと強さにおいて圧倒的なへだたりがある」とあり、哲学の思考法が単なる長さだけを問題としていないことが分かります。よって、深さや強さの意味合いも含んでいるウ「とことん」が正答となります。一読して文意が繋がる選択肢を選ぶので

はなく、前後を理解した上で、なぜこの選択肢が正しいか、なぜこの選択肢がふさわしくないかを考えた上で解答できるようにして下さい。

問六 著者は、「物を考える時の」、「一番大事なこと」は「本質をとらえること」だと述べ、それを説明するために教育を例に挙げています。誤答では「役に立つ」が目立ちましたが、これは哲学と全く逆の立場です。本文最初（第3・4段落）で、ものごとの本質を問う「いかにも哲学的な」問いかけを、「そもそも」と言い換えています。ここに注目しましょう。

問七 本文の内容を正確に読み取れているかを問う問題です。傍線部の「共通了解」という語句に注目すると、「だれもが納得できる本質的な考え方」という箇所を見つけ出せるはずですが。論理的文章は、説明のために同じ事柄を、言い換えながら繰り返し述べる場合があります。「字数制限」を手掛かりに、その中から最もふさわしい箇所を探し出しましょう。

問八 本文の内容を正確に読み取れているかを問う問題です。誤答では、傍線部に続く一文に着目し、エを選択した例が目立ちました。この一文は、文頭に「実際」とあるように実例を示しただけで、設問のいう「理由」にはなりません。十分な共通了解を持たない場合に、議論が混乱する「理由」を問われているのですから、「なぜ」共通了解がない場合には混乱するのか、その説明を選択肢から探す必要があります。

問九 本文の内容を正確に読み取れているかを問う問題です。良く出来ていましたが、字句を正確に抜き出さず、減点となる解答も少なくありませんでした。「抜き出し」の際には、この点に注意して下さい。

三

【現代語訳】

翌年の十月二十五日、大嘗会の御禊と世間で大騒ぎしている時に、初瀬詣するための精進を始めて、その御禊当日、京を出発するのだが、身内の人々が「天皇一代に一度の見物であって、田舎に住んでいる人さえ上京して見物するのに……。初瀬詣に出かける月日はいっぱいある。わざわざ御禊当日に京を旅立つのも、ほんとうに狂気じみて、後世の語り草にもなるにちがいないことである」などと、兄弟は言って腹を立てるけれど、子どもたちの父親は、「どうであろうと、あなたの気持次第だろう」と言って、私の言うのに従って、出立させてくれる心遣いは有難い。一緒に行く人々も、世間の人々と同様、ほんとうに是非とも御禊を見物したそうであるのは、気の毒だけれど、「そんなものを見物して何になろう。何にもならない。このような時に参詣すれば、その気持ちを、いくらなんでも仏様はきっと殊勝にお思いになるだろう。必ず仏の御利益を得るだろう」と思い立って、その御禊当日の暁に京を出て行く時に、御禊に向かわれる天皇の行幸が通る二条大路を、ちょうど渡っていくと、先頭に御灯明を持たせ、供の人々が浄衣姿であるのを、大勢の人々が、棧敷に移ろうとして、行き違う馬上の人々も、牛車に乗っている人も、徒歩の人も、「あれは何だ、あれは何だ」と、穏やかならず言って驚き、呆れ笑い、嘲る者たちもいる。

良頼の兵衛の督と申し上げた人の家の前を通り過ぎると、主人が棧敷にお渡りになる時だったのだろう、門を広く押し開けて、人々が立っていたが、「あれは物詣でに出かける人であるようだ。物詣でに出かける月日なんて他にいくらでもいっぱいあるのに……」と笑う中に、どういう信仰心のある人であろうか、「一時の目を肥やして何になろう。何にもならない。こんな時に殊勝に物詣でを思い立って、仏の御利益を必ず被りなされるにちがいない人であるようだ。物見に夢中になるのはつまらないことよ。私も、見物などせず、この人のように物詣でを思い立つべきだったなあ」と真剣に言う人が、一人だけある。

【解答】(50点)

問一	a かなづき	b 徒歩	(各3点×2)	
問二	A エ	B エ	C イ	(各4点×3)
問三	イ		(4点)	
問四	② ウ	③ ア	⑤ エ	(各4点×3)
問五	初瀬に詣でる日は、他にいくらでもあるのに。			(4点)
問六	べかり	ウ		(3点)
	けれ	カ		(3点)
問七	i	菅原孝標女		(3点)
	ii	イ		(3点)

【解説】

問一 「十月」の異名が問われています。「異名」という語の意味は、「なお」以下の説明から分かるはず。「かち」が「徒歩」であることも古典常識です。正答率は6割程度でしたが、問題文をよく読まず「神無月」と漢字で解答した人がいたのは残念です。

問二 現代語の「ののしる」は大声で非難することですが、古語では世間で大騒ぎするという意味です。「ゆかし」は心引かれるが原義で、文脈によって見たい、知りたい、読みたい、聞きたいなど、より明確な意味に捉えるべき形容詞です。ここでは、「もの」という接頭語が付き、さらに孝標女の視点で供人たちの様子を、形容動詞化して「～げなり」と表現しています。供人たちは世間の人々と同様、大嘗会の御禊が見たそうにしているのです。「そこら」も、古語では「大勢」の意味でした。正答率は4割程度。

問三 「その日しも」の副助詞「しも」は、「その日」を強調しています。「その日」は、その前の箇所「一代に一度の見物にて、田舎世界の人だに見るものを」を受けて、京の人々は皆、見物する日なのに、なぜそんな日にわざわざ京を離れて初瀬詣に出かけるのか、という文脈です。正答率5割程度。

問四 「心にこそあらめ」は、気持ち次第である、という意味の慣用句です。「おほしなむ」は、「おほす」が「思ふ」の尊敬語であることに注意しましょう。主語は長谷観音、すなわち仏様ということになります。「なむ」は、連用形に付いているので、きっと……だろう、の意。「よしなしかし」は、直後の「物見で、かうこそ思ひ立つべかりけれ」に連続する感情で、「よしなし」は、物見に夢中になるなど、わけがわ

からない、つまらない、の意になります。「かし」は、念を押す終助詞。正答率3割程度。

問五 「月日しもこそ世に多かれ」は、「と笑ふ」とあるので、前段の終わりに「あさみ笑ひ、あざける」とあった御禊見物に疑問を持たない俗世間の人々と同じ気持ちで発せられた言葉です。「こそ」+已然形は、強調逆接を表す用法があります。「多かれ」は、多いのに……、という意味です。ここもまた「しも」で「月日」が強調され、初瀬詣に出かける日なんて他にいくらでもたくさんあるのに(どうしてよりによって大嘗会の御禊が行われる今日出かけるのか)、というのです。正答率が2割程度でした。

問六 古典文法の問題。助動詞「べし」には多くの意味がありました。ここは、皆が作者を嘲笑する中、真面目な顔で、私も、御禊見物などに夢中になるのではなく、あの人のように、初瀬詣でも思い立つのが「適当」な身の処し方だったと気づいて「詠嘆」する人が、1人だけいたというのです。正答率5割程度。

問七 文学史の問題。「菅原」を「管原」としたり、「孝標」を「考標」としたりする誤りに注意。日記文学史は、「男もすなる日記といふもの、女もしてみむとてするなり」と始まる紀貫之の『土佐日記』から、藤原兼家の夜離れに苦悩する右大将道綱母の『蜻蛉日記』、敦道親王との恋を綴った『和泉式部日記』、中宮彰子に仕えた後宮生活を伝える『紫式部日記』、源氏物語に憧れた少女時代から晩年までの女の一生を回想する『更級日記』までの流れを、確実に押さえておくこと。『讃岐典侍日記』は、寵愛を受けた堀河天皇の崩御と追慕を記録する、藤原長子による十二世紀初頭の日記です。